令和元年度スジアオノリ養殖概況

加藤慎治

平成30，令和元年度の月毎の徳島県漁連共販数量の推移を図1に，年度毎の共販数量と平均単価の推移を図2に示した。

10月中旬から天然採苗場が解禁となったが，事前にまとまった降雨もなく例年見られる種場の淡水化は確認できなかった。淡水化により採苗が不調であった昨年度と比べ，採苗作業は比較的順調に行われたが，種網の設置場所によっては不調となったところもあった模様。また，昨年度の天然採苗期には網地への付着生物（コケムシ）の着生が多く見られ，製品へ混入するなど問題となったが，今年度はコケムシの大発生は見られなかった。

本養殖は11月中旬から開始され，漁期初めから高水温で推移したものの天候および海況は安定していたため好漁が期待されたが，アオノリの生長は著しく不調で葉長10cm程度で伸長が止まり流失する藻体が多く見られ，その結果漁期終盤までまとまった収穫とはならなかった。

近年は漁場の高水温化や豪雨など漁場環境が安定しないことに加え，吉野川河口域の栄養塩が減少傾向にあり，生産の難易度が上がっているように思われる。これまで以上に気象や漁場環境をしっかりと把握した上で採苗時期の決定や網管理を行っていく必要がある。

令和元年度の徳島県漁連共販実績は凶作であった前年漁期をさらに下回り過去10年で最も少なかった。月別の実績では1月の数量が最も多かった（図1）。共販の最終結果は数量8.0トン，金額3.2億円，平均単価40,238円だった（図2）。

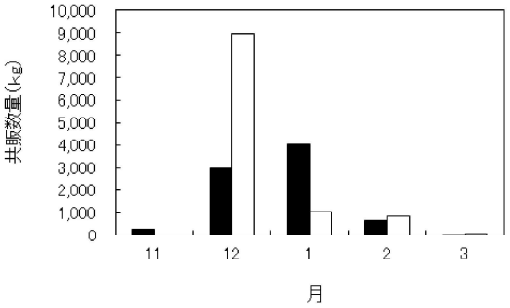

図1.　平成30，令和元年度における共販数量の経月変化
■：令和元年度；□：平成30年度

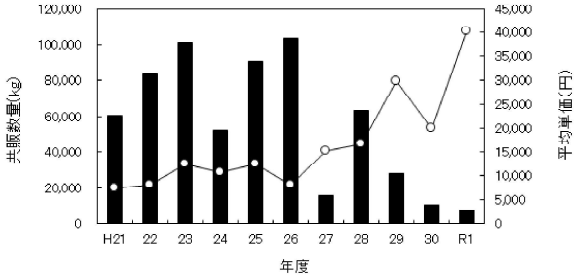

図2.　年度別共販数量と平均単価の推移
■：共販数量；○：共販単価